

受賞者の業績



畠山 貞子 50歳（保健婦・岩手県）

昭和47年より軽米町に奉職。県北地域の交通の不便な山間地区で、精力的に家庭訪問を行う。健康教育にも力を注ぎ、夜間の巡回指導もいとわず、地域に根ざした活動を展開。また、保健推進員の教育・育成に尽力し、母子保健活動の向上に多大な成果があった。近年は保健婦の視点で母子保健の成果と課題を分析し、21世紀に向けた計画を立案。きめ細かい活動と支援に努めている。



小山田 雍 54歳（小児科医・秋田県）

昭和58年開業と同時に大曲市の乳幼児健診担当医として健診に携わる一方、地元関係者に働きかけ「乳幼児健診の懇話会」を開催し、健診の精度向上に貢献した。また、秋田県の重点課題である少子化、母子保健対策に情熱的に取り組み、すこやか子育て事業、乳幼児健診の手引きの作成、乳幼児の死亡対策、小児アレルギー疾患対策事業の促進と周産期医療センターの整備等に寄与した。



佐山 静江 51歳（助産婦・栃木県）

昭和52年より獨協医科大学病院で、育児不安等の問題がある事例を地域の市町村・保健所等と連携・支援する体制作りをし、継続看護として定着させた。栃木県の周産期死亡率改善のため、平成8年に周産期医療施設協議会が発足し、助言・指導に尽力した。獨協医科大学にも地域の中核として総合周産期母子医療センターが整備され、周産期死亡率の改善に寄与した。



杉山友江 54歳（保健婦・群馬県）

昭和43年より笠懸町に奉職。「健康な町づくりは母子保健から」と一貫して母子保健の向上に尽力している。妊娠中から母と子の健康状態が一目でわかる母子健康相談票を作成するとともに、乳幼児健診の確立に大いに寄与した。また、母子保健推進員の育成に努め、平成9年には次代の笠懸町を担う子どもたちが、健康に生まれ育つための「笠懸町母子保健計画」の策定に、担当者として尽力した。



福留浩子 48歳（保健婦・千葉県）

昭和49年より鎌ヶ谷市に奉職。「地域の中で醸成される子育て」を提唱し、妊娠から就学時までの健康管理台帳の作成を立案し、体系化に寄与した。平成8年、母子保健事業の委譲に当たって中心的な役割を担い、円滑な導入を実現させた。子育てに関する意識調査を実施し、関連機関の意見等を踏まえて「鎌ヶ谷市母子保健計画」を策定。今後の母子保健事業発展に力を発揮すべく期待されている。



窪田一美 50歳（保健婦・新潟県）

昭和46年より小須戸町に奉職。平成3年より、親のための思春期セミナーの開設と関係機関連携体制の整備に取り組み、思春期の子をもつ親への支援を行う。同年、育児支援事業「あそびの広場」を開設し、育児サークルの育成に努めた。また、昭和57年から数年間、障害児の出生が続いたことをきっかけに、心身障害児療育教室の実施と親の会への支援に取り組み、大きな成果をあげている。



西川昭代 54歳（保健婦・福井県）

昭和44年より上中町に奉職。診療所に併設された母子保健センターを拠点に、医師や助産婦と連携し、妊娠・出産・育児と一貫した母子保健指導を実施。乳児死亡率、新生児死亡率、死産率の低下に成果を上げた。また妊婦や乳幼児の健診をきめ細かく実施し、母乳栄養の推進に寄与した。平成7年からは保健センターの開放と母親の自主的な育児サークル作りへの支援に尽力した。



渡 邊 佐智子 53歳 (栄養士・大阪府)

長年にわたり、大阪市立大学医学部附属病院栄養士として、先駆的に先天性代謝異常症患者の治療食の研究・開発・普及に取り組む。フェニルケトン尿症患者に対しては、親の会を通じて食事療法の指導など献身的な援助を行い、早期治療の徹底に努めるとともに治療用食品等の製品化にも大きく貢献した。27年間にわたる熱心な活動によって患者と家族を支え、大きな治療結果を得た功績は大である。



加 納 美智代 52歳 (母子保健推進員・和歌山県)

昭和52年より現在に至るまで川辺町の母子保健推進員として、熱心に家庭訪問を続けて妊娠届の早期届出、予防接種、乳幼児健診の勧奨などを行い、多大な成果をあげた。毎月の母子保健推進員研修会にも積極的に参加し、地域の母子保健推進の向上に尽力した。また、住民の身近な相談者となることにより、保健婦と地域住民とのパイプ役となり、母子保健推進の向上に寄与した。



今 津 敦 子 52歳 (保健婦・山口県)

有人の離島が多く活動範囲が広大な萩市において、昭和48年より「保健婦活動の原点は訪問指導にある」をモットーに活動を展開。妊娠届出時から全妊婦の母子健康管理カードを作成し、指導体制の確立に寄与した。健やかな一生の原点は胎児期から乳幼児期にあるという認識のもと、医療・保健環境の充実を図るため、地区保健推進員を組織し育成に努めた。



池 田 利 江 49歳 (助産婦・宮崎県)

昭和48年より病院勤務の助産婦として、母親学級や母乳外来の開設等に積極的に取り組む。同61年、日南市内に助産所を開設以来、要望があれば自宅に出向いて助産、褥婦への乳房ケア、沐浴、育児指導を行い、地域に根ざした活動を展開。育児サークル等を誕生させ、妊婦や子育て中の母親の育児支援に尽力した。また、市の行事にも積極的に参加、協力し、専門の立場からの確かな指導で支援している。



島田尚子 44歳 (栄養士・長野市)

昭和52年、長野市に奉職。保健所で実施されていた離乳食講習会を市独自に開始。食生活の指導・啓発に努め、住民と密着した離乳食講習会の基盤を築いた。同62年よりアレルギー指導に取り組み、知識の普及に努めた。平成6年から、幼児期に身につけた正しい食習慣が将来の生活習慣病を予防することから、肥満予防セミナーを開催。市民の意識改革、食生活の改善に大いに貢献した。



浅野明美 49歳 (小児科医・京都市)

昭和55年より現在まで、京都市内で延べ6か所の保健所にて乳幼児健診に携わり、診察や検査の工夫、健康相談の有効な活用法を模索し、実施して、母子保健の向上に寄与した。また平成5年、管内の虐待による死亡例をきっかけに、子どもの虐待防止活動に取り組む。同9年に設立された「京都子どもの虐待防止研究会」では幹事として活躍し、様々な企画の立案を担当するなど、多大な貢献をした。



草間由紀 51歳 (歯科医師・大阪市)

昭和48年の開業と同時に保健所の母子歯科保健活動に積極的に従事。母親の健康と口腔衛生、胎児期から乳幼児期における子どもの口腔衛生、歯列・咬合の状態、歯周の状態、病歴等について、また、歯科医師会が実施する母子の口腔衛生指導、ふっ素塗布などに従事し、地域の母子歯科衛生の思想の向上に貢献している。保健所事業にも熱心に取り組み、市民の健康作りに寄与した。



畠山文子 49歳 (保健婦・尼崎市)

産婦人科勤務を経て、昭和51年、尼崎市に奉職。ハイリスク児と初妊産婦・新生児の全家庭訪問を目指して活動し、乳幼児相談の充実に努めた。さらに命の大切さを伝えることに情熱を注ぎ、各中学校での講演会、赤ちゃんふれあい体験学習など、思春期の性教育にも積極的に取り組み、性教育の体制確立に寄与した。阪神・淡路大震災時には精力的な救援活動に従事し、今も被災者の心のケア等に力を尽くしている。